大寒小寒

土田耕平

青空文庫

おほ寒こ寒
山から小僧が
とんでくる……

冬のさむい晩のこと、三郎はおばあさんと二人で、奥座敷のこたつにあたつてゐました。庭の竹やぶが、とき／〃＼風に吹きたわむ音がして、そのあとは、しんとしづかになります。そして、遠くの方で犬の吠える声がきこえたりするのも、山家の冬らしい気もちであります。大寒小寒の唄は、さういふさむい晩など、おばあさんが口癖のやうに、三郎にうたつてきかせる唄でありました。

「おばあさん、小僧がなぜ山からとんでくるの。」

三郎は、今またおばあさんが口ずさんでゐるのをきいて、かう云つてたづねました。

「山は寒うなつても、こたつもなければお家もない。それでとんでくるのだらうよ。」

おばあさんは手に縫物の針をはこびながら答へました。

「小僧つてお寺の小僧かい。」

「何にお寺なものか、お寺ならお師匠さまがゐて可愛がつて下さるだらうが、山の小僧は木の股から生れたから、お父さんもお母さんもなしの一人ぽつちよ。」

「おばあさんもないの。」

「ああ、おばあさんもないのだよ。」

「それで小僧は着物をきてゐるのかい。」

「着物くらゐはきてゐるだらうよ。」

「誰が着物を縫つてくれるの。」

「そんなことは知らないよ。大方木の葉の衣かなんだらう。」

木の葉の衣つてどんなものだらうと、三郎は想像してみたが、はつきり思ひ浮べることはできませんでした。

「小僧は山からとんできてどうするの。」

「人の家の門へ立つて、モシ／＼火にあたらせておくんなさい、なんて云ふのだらう。」

「そして、火にあたらせてもらふの。」

「いゝえ、火になんぞあたれない。」

「なぜ。」

「小僧のいふことは、誰の耳にもきこえないのだから、いくら大きな声をしたとて聞えない。もしかすれば、今じぶんお家の門へきて立つてゐるかも知れない。」

三郎はそんな話をきくと、気味がわるくなりました。頭を青くすりこくつた、赤はだしの小僧のすがたが、目に見えるやうにおもひました。おばあさんは、やさしい笑みを浮かべて、

「どれ／＼、一つお餅でもやいてたべよう。」

と云ひながら、縫物をわきへよせました。そして、こたつの火をつぎたして、その上へ金網をわたしました。お餅のやけるかうばしい匂ひをかぐと、三郎はもう小僧のことなど忘れてしまひました。

三郎は大人になつて、東京のにぎやかな町なかでくらすやうになりました。けれど毎年冬になると、大寒小寒の唄をおもひ出し、おばあさんを思ひ出しするのでありました。幼い三郎がかさね／〃＼問ひたづねるのを、少しもうるさがることなく、しんせつに答へて下されたおばあさんを、どんなにかなつかしくおもひましたことで

せう。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系　第九巻」ほるぷ出版
　　1977（昭和52）年11月20日初刷発行
底本の親本：「原つぱ」古今書院
　　1928（昭和3）年4月
入力：菅野朋子
校正：noriko saito
2011年7月14日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大寒小寒

土田耕平

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/